

V・パーセル著

## 『マレーシア』

Victor Purcell, *Malaysia*, Thames and Hudson, London, 1965, 224p.+98 illustrations+3 maps.

はからずも Victor Purcell (1965年の1月4日, 68歳で死去)の遺著となった『マレーシア』は Thames and Hudson 社の New Nation and Peoples Library の一冊として、最近刊行されたマレーシアに関する概説書である。この本に先立って第2版の出た Victor Purcell の *The Chinese in Southeast Asia* (Oxford Univ. Press, 1965) は、人も知る華僑研究の古典的名著(第1版は1951年)であるが、この『マレーシア』は、その性質上、啓蒙的色彩の濃い概説書である。

本書はつぎのような8章よりなっているが、そのうち最後の章である「マレーシア」は、Purcell の急逝により、Derrick Sington (*Times* の高名なアジア担当記者)により改訂補筆されている。

- 第1章 マラヤ: その基底
- 第2章 マラヤの人間
- 第3章 帝国主義の時代
- 第4章 イギリスの支配
- 第5章 マラヤの独立
- 第6章 独立後のマラヤ
- 第7章 サバとサラワク
- 第8章 マレーシア

以下、章別にその内容を簡単に紹介してみよう。

第1章は、マラヤ地域が「人類学上の博物館」と呼ばれるように、いくたの原始人とマレイ人と、中国人、インド人の移民によって構成される多民族地域であることから筆を起し、この地域に影響を与えたヒンズー文化、仏教文化、イスラム文化とマラヤの王朝の歴史——Langkasuka (紀元後2世紀頃のインド系王朝)に始まり、Sri Vijaya (紀元後7~9世紀の仏教系王朝)、Majapahit 王国 (紀元後14~15世紀のヒンズー・ジャワ系王朝)、Malacca 王朝 (紀元後15~16世紀のヒンズー系王朝。しかしイスラムに改宗)——を述べた後、16世紀以後のポルトガル、オランダを経て、イギリスの支配にいたる西欧諸国のアジア進出の歴史にふれている。

第2章は、マラヤの民族別人口構成(1960年中間時)から筆を起し、マレイ人と称せられる民族の中にもいくつもの種族があることを指摘して、これらのマレイ人

がマレイ人と総称される理由は、(1)かれらがすべて回教徒であること、(2)かれらはマラヤに来ると直ちに、いずれかのサルタンの臣民となること、の二つの理由をあげている。そして、マレイ人が、マレイ人としてのコミューナルな意識をもつにいたったのは、イギリス支配の下で、滔々と流入してくる中国人移民に対して、自己を防衛する必要から生まれたものであることを指摘している(p.41)。ついで、中国人移民社会の帮組織にふれ、それぞれの帮と職業との関連を述べた後、一般的に言って、中国人が、イギリスと中国人以外の社会との middle men として機能してきたことを指摘している。そして、イギリス支配の下で、中国人社会は、帮による相互対立とは別に、英語教育を受けた中国人 (Baba Chinese と呼ばれる) と中国語教育を受けた中国人 (後者のほうがもちろん多数である) との対立が生まれつつあること、したがって教育問題が重要な意味をもっていることを指摘している。評者も現地ですばしば中国人から Baba Chinese に対する不満と憎悪を聞かされることが多い。

他方、筆者は、イギリス支配の下で kampong 生活の向上のためには、わずかに排水と給水が行なわれたのみで、「マレイ人の一般民衆を、他のコミュニティの民衆の生活水準まで持ち上げるということは、未解決の問題であった。——しかし、少なくともかれらは、食べるものには事欠いていなかった」(p.51)と述べている。

第3章は、イギリスのマラヤ支配が、もしイギリスが介入して秩序を打ちたてなければ、他の大国が介入したであろうという恐怖から出発していたことを指摘した(p.65)後、イギリスのピナン、マラッカ、シンガポールを経て、マラヤ諸州(ペラ、セランゴール、ネグリ・センビラン、パハン)を自己の支配下に治めていった経過を述べ、特にイギリスの介入により、マラヤ諸州に秩序が回復されるとともに、しだいに奴隷や賦役労働がなくなってきたことにふれている。そして1874年のパンコール条約(イギリスとペラのサルタンの間)によって打ちたてられた「マレイ人の宗教と慣習を除くあらゆる問題について、イギリスの駐在官(Resident)の意見に従って行動する」(p.74)という原則が、マラヤ諸州のイギリス統治の原則となったことを指摘している。そして、結論として、「歴史をもたなかった国は幸福である。そのことは、1875年以後のマラヤの歴史が、主として、統計学的であることから、明らかどころである(p.77)と述べている。しかし、評者の立場からみる場合、マラヤの15世紀以後の歴史をポルトガル、オランダ、イギリス

の支配の歴史という立場からのみでなく、この国の国民の立場からみる歴史研究が今後発展することによって、このような結論（かなり通説化していると思われるが）が修正されることを期待せざるをえない。

第4章は、イギリス支配の下で、経済、鉄道、道路、保健、教育等の諸側面が飛躍的に発展した経過を述べながら、「現代のマラヤは、イギリスと中国の企業家の共同労作であるといえよう」（p. 94）と述べている。そして「したがって、独立マラヤの政府の仕事は、マレイ人が、上記の富の分けまえにさらにあずかるようにすることである」（p. 94）と付け加えている。しかし、Purcellも指摘しているように、このような富の偏在と複合民族社会の形成は、植民地の処理にあたった「大臣たちが、“City”（ロンドンの金融・商業の中心地）の利益を代表していたのであって、たまたま両大戦間にマラヤを訪れた大臣たちの主たる関心事は、ゴムとスズにあって、かれらのほとんど知らないマラヤの国民のことにはなかつた」（p. 92）という支配のあり方こそ、独立マラヤが直面した諸問題の基礎であったといえよう。

第5章は、20世紀のアジアにおける偉大な推進力がナショナリズムであることから筆を起し、マラヤにおいても中国のナショナリズムが大きな影響力を与えたこと、これに対し、マレイ系のナショナリズムはあまり強くなかつたことを指摘している。そして、「その主たる理由が、マラヤの複合民族社会という特質およびマレイ人社会が、急速に膨張する中国人社会に対する保護をイギリスに求めようとする感情をもっていたことにある」（p. 108）と述べている。しかし、日本のマラヤ進出とともに、イギリスの権威はしだいにくずれ、第2次大戦後、イギリスがマラヤ支配の新たな方式として打ち出した「マラヤ連合」（Malayan Union）に対するマレイ系政治指導層の反対から、初めてマレイ系社会のナショナリズムが強い力を持ち始めたことを述べている。そして、この運動の中から生まれた「統一マレイ国民組織」（United Malays National Organization）が中心となって、「マラヤ中国人協会」（Malayan Chinese Association）および「マラヤ・インド人会議」（Malayan Indian Congress）の協力を得ながら、自治を経て独立を達成するにいたった過程を述べている。そして、「イギリス政府が“赤信号”がちょうど見えかかったときに（マラヤに独立を与えたことは）、イギリスにとっても、マラヤにとっても、イギリス連邦にとっても、まさに幸運なことであった。もし、イギリス政府がその支配に固執したならば、イギ

リスはインドネシアのオランダ、インドシナのフランスと同じ運命にあったことであろう」（p. 117）と指摘している。

第6章は、マラヤを囲むアジアの国際情勢について、共産中国、インドネシア、SEATO、イギリス連邦、アジア・アフリカ・ブロック、等の動向にふれた後、1955年から1964年に至る3回の選挙の結果を分析している。そしてこれらの選挙において、Alliance（上記のUMNOとMCAとMICの連合）が、いずれも勝利を収めているにもかかわらず、候補者の数をめぐってUMNOとMCAの間で激しい対立が繰り返されてきたことを指摘し、かつマレイ系社会における「全マラヤ回教政党」（Pan-Malayan Islamic Party）の動きと、他方「社会主義戦線」（Socialist Front, Labour PartyとParty Ra'yatの連合）、「人民進歩党」（People's Progressive Party）の動きにふれている。そして、さらに、Allianceが、マラヤの大都市の周辺であり支持をもたないことにふれて、「Allianceに対する最大の危険は、左翼的諸政党からくる」（p. 135）と述べている。さらに、もちろん、マラヤにおいては、コミユナルな対立がたえざる問題ではあるが、ラーマン首相は、「真の敵がコミユニズムであることになんの幻想もいだいていない」（p. 140）と述べている。ついで、Purcellは、シンガポールにおける「人民行動党」（People's Action Party）と「社会主義戦線」（Barisan Socialis）について述べ、シンガポールの共産主義勢力の影響力を強調している。

第7章のサバ、サラワクの項は、両地域の人種別構成と、歴史と現状を概観している。

第8章は、すでに述べたごとく Mr. Derrick Singtonの手になるものであるが、かれはマレーシアについて「シンガポールの中国人は、マラヤ連邦との連合に賛成であったが、連邦のマレイ人はそれに反対であった」（p. 185）ということから筆を起し、ラーマン首相（マラヤ連邦）と李光耀首相（シンガポール自治領）との背景、考え方の違いにふれ、特に1962年9月の李首相のモスクワ訪問に対するラーマン首相の反対声明を引用している。しかし、これらの違いにもかかわらず、両者の共産主義勢力に対する恐怖がマレーシアの結成に帰着した経過を述べ、結論として「1965年の当初において、マレーシアが生き残るか否かは、インドネシアのゲリラに対する軍事的抵抗によるよりも、マレーシア連邦内の諸民族間の調和ある発展によるところが多い」（p. 203）と結んでいる。

しかし、その後の事態は、ラーマン首相と李首相の考え方の違いと（それはもちろん個人の違いであるのみでなく、Alliance と人民行動党の違いであるが）、それによって惹起される恐れのあったコミユナルな対立への恐怖から、シンガポールがマレーシアから分離したこと（さる8月9日）は、事実の示すごとくである。

以上で紹介したように、この書は、マレーシアの歴史と現状と問題点を知ることで、すでに書評した Prof. Wang Gungwu ed., *Malaysia—A Survey*, および Prof. K. G. Tregonning, *Malaysia* と並ぶ最近の概説

書であるが、読者はその底流となっているイギリス的立場ということを十分に考慮した上で目を通すならば、今後の研究のためのいくつかの問題点を探り出しうるものといえよう。なお、この書物は、98葉の写真が挿入されており、簡単な参考文献目録、人名録も付け加えられていて、手軽なマラヤ研究入門書としては恰好なものといえよう。

（海外調査員 萩原宣之）  
—— 在クアラルンプール ——

## フィリピン、インドネシアの電力事情

—— 研究参考資料 第89集 ——

海外電力調査会編

### 第1章 総括編

#### 第1節 総 説

#### 第2節 電力需給の特徴点

—— 発電・需要・企業形態・電源開発（水力、火力、送電線） ——

#### 第3節 電力需給の展望

—— 想定の方法・需要電力量の想定（事業用発電電力量、自家発自家消費電力量）・供給力の見通し（供給事業用設備出力、自家用発電設備）・想定需要電力量の吟味（時系列計算値との比較、国民経済マクロ指標との比較） ——

### 第2章 各国編

#### 第1節 フィリピン

—— 電気事業の概況（概説、フィリピン電力公社、マニラ電力会社、その他電気事業者）・電力需給の状況（供給力、産業用自家発、電力需要の現状）・電源開発（エネルギー資源、電源開発の現状）・電力需給の展望（需要の見通し、供給力の見通し、自家発電、総合考察） ——

#### 第2節 インドネシア

—— 電気事業の概要・電力需給の状況（供給、産業用自家発、電力需要）・電源開発（エネルギー事情、電源開発の現状）・電力需給の展望 ——